

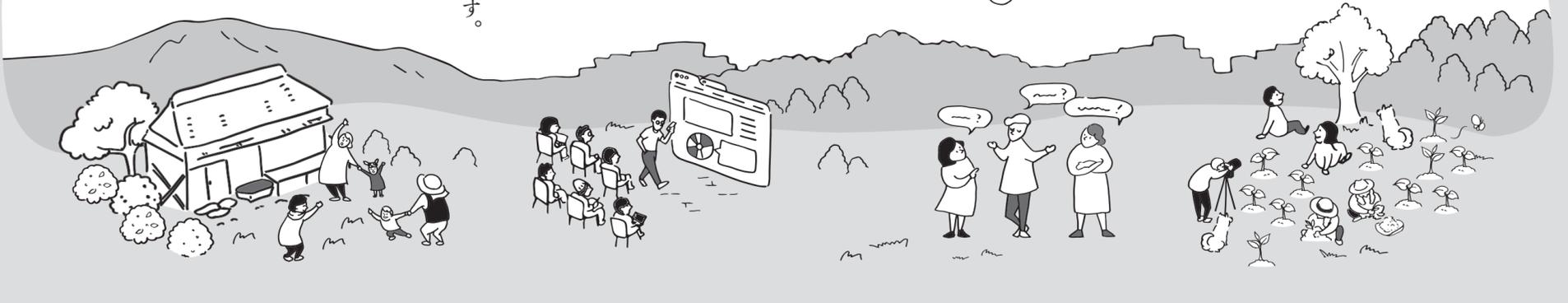
視点を変えれば、 世の中は変わる。

たとえば
半分だけ水の入ったコップを見て、
もう半分しかない、と思うか、
まだ半分もある、と思うか。

視点を変えれば、
世の中の見え方は変わってきます。
当たり前だと思っていたことでも、
違う視点から見つめ直してみると、
新しい発見があることがあります。

Rethinkフォーラムは、
一人では気づけない
新しい視点に気づくことで、
地域活性化のきっかけを見つめる場です。

視点を変えれば、世の中が変わる。
地域が変わる。
未来を変える発見は、
意外と身近に
あるのかもしれない。



「Rethinkフォーラム～視点を変えれば、世の中は変わる。～」(山形新聞社主催、山形県など後援、Rethink PROJECT協賛)が5月25日、山形市の山形グランドホテルで開かれました。第1部は編集者・評論家の山田五郎さんが「芸術は産業だ！」と題して講演を実施。第2部は山形市長と東北芸術工科大学の中山ダイスケ学長が加わり「文化×芸術×産業による『創造都市やまがた』を考える」をテーマにパネルディスカッションを行いました。約140人が来場し、熱心に話に聞き入りました。要旨を紹介します。

ゲスト



やま だ ご ろ う
山田五郎氏 (編集者・評論家)
演題：芸術は産業だ！

1958年東京都生まれ。上智大学文学部在学中にオーストリア・ザルツブルク大学に1年間遊学し西洋美術史を学ぶ。講談社「Hot-Dog PRESS」編集長、総合編集局担当部長等を経てフリーに。現在は時計、西洋美術、街づくり、など幅広い分野で講演、執筆活動を続けている。

★ オリジナリティーは地元にこそある ★

山形市には5年ぶりに参りました。山形市は50年前に山形交響楽団(山響)が東北初のプロオーケストラとして誕生した都市で、1989年からは国際ドキュメンタリー映画祭を開催。2017年にはユネスコ創造都市ネットワークに加盟し、国際的な映画の街として認知されています。さらに去年、創造都市の拠点としてクリエイティブシティセンターQ1がオープン。14年から山形ピエンナーレを主催している東北芸術工科大学もありますし、歴史ある伝統工芸も数多く残されている。美術に関するリソースと可能性が十分にある都市だと感じています。

さて今日の演題は、岡本太郎の名言「芸術は爆発だ！」から取りました。芸術の本質を表現した金言ですが、太郎のキャラが立ち過ぎていたため、芸術とは奇抜で訳の分からないものだというステレオタイプなイメージを強める結果にもなりました。そこで今回はRethink、視点を変えようというテーマにちなみ、「爆発」の対極にあるビジネスという観点から芸術を考えてみたいと思います。

★ 現代アートが抱える「ねじれ」

アートは感性の爆発であって理屈じゃない。ましてお金じゃない。これもステレオタイプなイメージです。しかし私が美術、特に現代アートに関して一番よくされる質問は、「一体この作品は何を表現しているの?」次に「この作品は本当に何億円もする価値があるの?」です。つまり、理屈じゃないお金

じゃないといわれながら、理屈で説明を求められ、お金で価値を判断される。これが現代アートの抱える本質的なねじれだと思います。

岡本太郎は単に奇抜な芸術家と誤解されがちですが、実はとても明晰で、「芸術は爆発だ！」をビジネスとして成功させた人でもありました。西洋絵画の歴史を振り返ると、17世紀以前は教会や王様などに頼まれて描く受注生産がほとんどでした。しかし18世紀の市民革命以降はアーティストが自発的に描いた作品を画廊が広く一般に売る市場へと変わり、アートが自己表現になりました。さらに19世紀に写真が発明されると、写真にはない光や色彩の微妙なゆらぎを表現しようと印象派が、20世紀に入ると目に見えない概念や感情を表現しようと抽象絵画が登場します。岡本太郎は、こうした西洋絵画の流れを正しく理解した上で、現代の芸術は「巧い、きれいな、心地よい」の対極にしなければならないと考えて「芸術は爆発だ！」と主張した。決して単なる思い付きや勢いだけで叫んでいたわけではないのです。

★ 「売る」観点から広がる芸術の可能性

太郎に学ぶことがもう一つ。「太陽の塔」などの作品を見てもお分かりのように、彼は自分だけのオリジナリティーを日本の縄文文化に求め、その美を再評価しました。ここが大きなポイントです。国際的な評価を得るためには、逆にドメスティックを極めるべきなのです。藤田嗣治、草間彌生など、国際的に評価されるアーティスト全員に共通するのは、日本の文化

に根差した表現をしている点です。国際化とは、西洋化することではありません。外ばかり見ていると、物まねにしかありません。自分にしかできないものは自分の中にしかないのです。だから地元を大事にしてほしい。今、日本中どここの街も同じ問題を抱えています。それは地元の人が地元を好きではないということ。山形には、山形にしかない良いものがあります。視点を変えて、地元を掘り下げてみる。それが逆に山形を国際化してゆく原動力になるはずですよ。

日本には、素晴らしいアーティストがたくさんいます。ところが、彼らの作品の価値を分かりやすく説明する批評家や、より魅力的に展示する学芸員や、国際市場に売り出す画廊や、町おこしに結びつけるプロデューサーなど、いわばアートを売るための人材が、圧倒的に不足しているのです。Q1には、ぜひともそうした人材を育成する場にもなってほしい。アートはお金ではありませんが、視点を変えて「売る」という側面から考えてみることで、逆に真の価値が見えてくるのではないかと思います。

テーマ「Rethink山形～文化×芸術×産業による『創造都市やまがた』を考える～」

パネルディスカッション出演者 山田五郎氏 (編集者・評論家)、山形市長、中山ダイスケ氏 (東北芸術工科大学 学長) モデレーター 佐藤博子氏 (フリーアナウンサー)

ブランドになり得る山形市の文化

佐藤 山形市は「健康医療先進都市」と「文化創造都市」の2大ビジョンを掲げています。このうち「文化創造都市」について取り組みや展望を教えてください。

山形市長 かつて山形市のブランドといえば温泉やお酒など自然由来のものがほとんどでした。しかし私は山形の街を見て、都市的な部分でもブランドになるものがたくさんあると感じました。その一つが文化です。25万人規模の都市でプロの交響楽団や国際的な映画祭、芸術大学を持つ都市は他にありません。その価値をまず市民が認識することで、市民が文化をより享受できると考えました。また2017年、日本で初めて、ユネスコ創造都市ネットワークの映画分野で加盟認定されました。加盟を機に山形市では、世界の都市とネットワークをつくり、その創造性を生かすことで産業や雇用を生み出し、持続可能な都市づくりを目指しています。

佐藤 山田さんは山形市にどのような印象を持っていますか。
山田 美術という、日本で初めての本格的な洋画家といわれる高橋由一が、初代県令三島通庸の要請を受けて山形市街図などを描きました。明治の黎明期に近代絵画をいち早く取り入れており、当時から進取の気性やモダンな感覚があったのだらうと思います。

「よそ者の目」と出会いこの街を好きになる

佐藤 芸術大学にとって山形の街とは?
中山 東京でよく「大自然の中で学んでいるんですね」と言われますが、そんなのなきなもではありません。山形県、山形市は「課題先進都市」でもある。少子化、高齢者の交通問題、産業の衰退など日本がこれから直面する課題が先行しています。そうした課題のそばに芸術大学がある。だから学生が取り組む課題はほぼ100%、地域から与えられた課題です。山形産のモノをデザインので世界に届けられるか?—といったことをとことん、山形の人と一緒に考えられるのです。机上の空論ではなく、対話が成立し、学びが機能しています。そこからさらにこの街のポテンシャルを高めていくのが芸術大学の役割だと考えています。山田さんがおっしゃる「この町を好きじゃない大人」に育てられた子どもたちが、他県出身学生の「よそ者の目」と出会い、この街を好きになるんですね。

佐藤 新たな視点で、これからもより自分らしく発見を得るためには何が必要でしょうか?
山形市長 Q1のオープンに至るプロセスは私にたくさんの気づきを与えてくれました。芸工大や関係者の方と話し合い、コンセプトを徐々に固めていく進め方は、連携の新しい形だと感じました。対話を重ねることでアイデアが生まれ、山形市の強みを

たくさん発見しました。この気づきを今後に生かしていきたいです。

中山 山形市に通って16年になります。山形の強みは何といっても四季だと思います。住んでいると忘れてしまいがち、当たり前こそが尊いと学生たちに教えたいですね。また、山響やドキュメンタリー映画祭など、山形市にある素晴らしい文化は、その価値を業界の方に高く評価されるもの、地元の方にはあまりよく知られていません。山形の方は普段の生活が豊か過ぎて、楽しく暮らせるので、足元の文化に気づいていないのかもしれないですね。芸工大はその価値をプロモーションし、地元の方が気づけるよう貢献していきたいです。

新たな視点を受け入れる土壌

山田 町おこしや観光についてあちこちの自治体から相談されますが、私はそこに住んでいる人が幸せな街が一番だと思っています。ウェルビーイングという概念ですね。町おこしに欠かせないのは「わかもの・ばかもの・よそもの」で、外から見た街の良さを生かすことが大切だとよくいわれますが、実際にやるのは難しく、大体衝突します。しかし、山形の皆さんならできると感じました。山響やドキュメンタリー映画祭を長く続けてきた市民の皆さんの辛抱強さと文化への理解が、地元と外の視点との融合を可能にするはず。そこから生まれる成果を楽しみにしています。

